

【月夜の夢逢瀬 Side—Luna】

「はあゝ」

今日のシフトを終えた私は、従業員室の椅子に腰掛けると、テーブルの上に突つ伏しながら大きな溜息を吐いた。チラリと壁に掛かったカレンダーに視線を向ければ、『7月』の文字がデカデカと記載されている。7月という時期にしては肌寒さを感じるけれど、それでもまだ7月は始まったばかり。

「はあ、あと3週間ちよつか……まだ先は長いなあ」

これで何度目の溜息だろう。今日だけでも数えきれないぐらい溜息を吐いてるなあ。我ながら、よく我慢できていると思う。けど、まだまだ我慢の日々は今月いっぱいまで続くと思うと、つい、私の口から本音が零れ落ちてしまう。

「トーマに会いたいよお——」

次に私がトーマに会えるのは【決戦の日】——8月1日だ。一ヶ月を切ったとはいえ、我慢もそろそろ限界にきてるかも。自分で決めたことなのに、今すぐにでも会いに行きたくなる。だって、約二ヶ月前まではほぼ毎日会っていたのに、イッキさんに相談して決心した日から一度もトーマには会ってはいない。——私が『寂しい』って思っているように、トーマも少しは私に会えなくて『寂しい』って思ってくれてるかな？ 少しぐらいは

私を【女の子】として意識するようになってるかな？

「はあゝ……とおまあゝゝ」

私は再びテーブルに突つ伏し、盛大な溜息とともに愛しい男性の名前を口にした。

「お疲れゝゝ。ふうー、今日も疲れたあ」

背後から聞えてきた声に顔を上げれば、そこには私と同じ和風メイドの格好をした親友のサワが立っていた。ああ、そういえば、サワも上がりの時間だったけ。

「オツカレサマ……」

「……って、おわッーちよ、どーしたの、ルナ？」

眉根を下げて情けない顔をした私を視界に捉えたらしいサワが何事が起きたのかと、顔色を変えて駆け寄って来てくれる。

「ううー、サワあ」

そんなサワの優しさに泣きついてしまう。

「な、なに？ 体調でも悪いの？」

心配気なサワの言葉に首を横に振ることで『違う』と伝える。私は涙ぐみながら私の【症状】を口にした。

「トーマが足りないよおゝゝ。息できないよおー」

「ああ、なんだ。いつもの【トーマさん欠乏症】ね」

事情を知っているサワは納得顔で私の【症状名】を告げると、呆れた表情をしながら向かいの席へと腰かけた。

『なんだ』じゃないよ、私にとっては深刻なことなんだから——